

ドラクロワ作《十字軍のコンスタンティノーブル攻略》 ——歴史的細部の再現と普遍性——

西嶋 亜美（尾道市立大学）

ウジェーヌ・ドラクロワ作《十字軍のコンスタンティノーブル攻略》（1841年のサロン、ルーヴル美術館）はヴェルサイユ宮殿「十字軍の間」のための注文を受けて制作された歴史画である。すでに先行研究により、制作過程や視覚的参照源、色彩配置の効果が部分的に解明され、一部人物の同定が行われた他、中世の戦いを描く他作品と一線を画す普遍性が指摘されてきた。本発表では、従来看過されてきた主題に関する文献に注目し、画家がいかに同時代の歴史観を共有し作品制作を行ったかを具体的に示すとともに、前景の群像表現において歴史画に適った記念碑性を付与する工夫を指摘することで、ドラクロワの画面構成の手法に新たな考察を加える。

まず、1820年代以降盛んに出版される史料や歴史書から主題の典拠を調査すると、19世紀前半の十字軍史において被征服者の悲惨さが前景化している。こうした悲惨さはドラクロワ作品の背景や個々の人物に反映していると考えられる。中でも、教会や女性の冒流、街の焼討ちや略奪を詳述し、女性と子供が怯えて慈悲を訴える様子を史料の引用により提示したミショー著『十字軍の歴史』（1826年）が直接の参照源となった可能性は極めて高いことを、画面との比較から示す。併せて、略奪の対象として壮麗に描かれる左の神殿の意匠を、ブルボン宮「王の間」等の装飾を通じた画家の建築への関心と、古代建築における彩色表現の発見を受けた19世紀建築の潮流から分析する。

一方、騎馬の隊列の前で慈悲を乞う家族という人物配置は、ゲートヘンスが妥当にも姿勢と意味内容の類似を認める通り《トラヤヌス帝の正義》（1840年、ルーアン美術館）を踏まえている。発表では、十字軍の征服者と犠牲者を、謙譲の美德を示すトラヤヌス帝と母親に類似した姿勢で描く選択が、主題を踏まえた積極的な参照であることを論じる。すなわち、単に征服者と被征服者を対比させるのみならず、ラテン帝国最初の皇帝となるボードゥアンをヴェルサイユ宮殿の装飾に相応しい有徳の為政者として示したと考えるのである。また、この対峙の右側でひときわ目立つ女の背中の表現に、アントウェルペン聖パウロ教会のルーベンス作《キリストの笞打ち》が参照された可能性を、1839年9月の画家のベルギー・オランダ旅行との関連から提示したい。この女性像は背景に広がる犠牲者たちの受難を最前景で象徴的に表しえたために、批評家に賞賛されたと考えられる。なお、これらの前景の人物像が大画面に適した記念碑性をもたらす効果は、1852年制作の同主題のヴァリエーション（ルーヴル美術館）においてそれらが後退し目立たない様子と比較しても明白である。

このように、《十字軍のコンスタンティノーブル攻略》は、同時代の歴史観を踏まえつつ歴史を超えた価値を表す絵画を構成する、1840年前後のドラクロワの優れたバランス感覚を雄弁に示しているのである。